伝承活動 在り方議論

福島・大熊 支援団体がサミット

震災や戦禍、公害などに見舞われた地域で伝承活動に当たる団体を招き、後世への教訓の伝え方を考える「伝承の仲間づくりサミットｉｎ大熊」が11日、福島県大熊町で開かれた。各地の活動や遺構保存の事例などを通じて意見を交わした。

大熊町のＮＰＯ法人大熊未来塾が主催し、町民など約１２０人が参加。石巻市や熊本県水俣市、沖縄県、広島市などの伝承活動支援団体の６人が遺構保存の意義や活用方法を議論した。

石巻市の「大川伝承の会」共同代表の佐藤敏郎さん(60)は、大川小が保存に至った経緯を振り返り「残すか撤去か、どちらにも大義がある。双方の意見を聞くプロセスが大事だ」と強調した。

広島市の市民団体代表の多賀俊介さん(74)は、当初は保存反対の声も多かった同市の旧陸軍被服支廠(ししょう)の例を挙げ「反対を乗り越えて遺構を保存した後、どう利用するかまで議論を続けなければいけない」と述べた。

遺構保存の在り方などについて話す登壇者＝福島県大熊町の「ｌｉｎｋる大熊」

2024年2月12日(月)
河北新報